

2008年(平成20年)

第6号

(6月15日)

平安月報

The HEIAN monthly report

発行所：立正佼成会 京都教会

発行責任者：渉外部長 宮地啓安

〒605-0041 京都市東山区三条蹴上

TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

「ゆめポッケ・キッズキャンペーン」スタート

「ゆめポッケ・キッズキャンペーン」が6月1日、スタートしました。同キャンペーンは、紛争や対立で傷ついた世界の子供たちの心を癒やすため、文房具やおもちゃなどを詰めた手作りのポッケをおくる運動です。今年で10年目を迎えました。8月31日までの3カ月間、各教会の小・中学生が中心となり、ポッケ作りが行われます。

各家庭や教会で作製されたポッケは、この運動の協力団体を通して、アゼルバイジャン、アフガニスタン、パレスチナ自治区、レバノンで厳しい状況に置かれている子供たちに手渡されます。

1994年、本会は日本緊急救援NGOとともに、旧ユーゴスラビアの子どもたちに必要な文房具や日用品を送る「愛のポシュツ運動」に参画しました。その運動に取り組んだ4年の間に、旧ユーゴは政治的・社会的状況が混乱かと混迷の域から脱し、現地のニーズも緊急援助から自助自立のための支援へ移行しました。

しかし、子どもたちが苦しい生活を強いられている

ことに変わりありませんでした。そんな彼らには、物資でなく、心をなごませ、励ましてくれる「あたたかい心」が必要だと思われました。

そこで、「モノ」ではなく「まごころ」を届け、世界平和に向けて行動できる青少年を育成しよう、との願いからこの運動（ゆめポッケ運動）がはじまりました。

同キャンペーンのスタートに先立ち、京都教会は5月18日、「青年の日」の中で学習会を実施しました。当日参加した少年部員、学生部員ら約100人は、寸劇やレクリエーションを通じて、同キャンペーンの目的や内容などを学びました。

夏休み期間を中心に、多くの家庭、教会で心のこもった取り組みが展開されます。集められたゆめポッケは来年の3月から4月にかけて配布国に届けられます。



社会福祉について

6月7日、豊中教会において近畿ブロツク社会福祉担当者研究会が開催されました。11教会から参加した担当者から、「社会福祉」に対する取り組みや課題について報告されました。

少子高齢社会の時代を見据え、本会では1972(昭和47)年から仏教福祉の研究開発に努め、地域の福祉に貢献できる人材を育成してきました。その数は約3000人にも及び、全国各地で高齢者の介護などボランティア活動に励んでいます。

1999(平成11)年からは社会福祉活動に不可

欠な知識や技術を習得した専門のスタッフを全国各教会に配置。「心の救い」と共に現実的な諸問題に対応する活動を展開しています。

各教会の報告で多かった課題は、やはり、高齢化にともなう介護や年金の問題でした。また、社会性を反映して、経済的問題、特に多重債務の問題に取り組んでいました。京都においても、介護問題、中でも介護者に対するケアを中心に活動を推進していきます。

一般的な社会福祉とは異なり、本会での取り組みは、物心両面からのアプローチと、共に支えあう仲間(サンガ)により、信仰を基盤とした救いの実現を目指してまいります。

時事刻々
五月三〇日は人類の歴史に輝かしい日になった。ダブリンで開かれていた「オスロ・プロセス」の会議で、クラスター爆弾の全面禁止が決まった。
米ロが参加しない、NGOと有志国による軍縮条約は、九九年の対地雷禁止条約に続き2例目。当初、難色を示していた日本政府も福田首相の政治判断で同意したことは喜ばしいことだ。
京都にテラ・ルネッサンスというNGOがある。代表は二八歳の鬼丸昌也氏だ。カンボジアでの地雷除去支援、アフリカでの元子ども兵の社会復帰支援をおこなっている。
この若者は大学4年生のとき、このNGOを立ち上げた。七年の歳月を経て着実に支援活動を広げている。
クラスター爆弾の廃止に動いた人々や、鬼丸氏のような若者の存在は、平和を希求する多数の人々の心の支えになることだろう。

諸宗教対話のコーナー

宗教協力

第一回世界宗教者平和会議京都会議には中国代表の参加が叶わなかったが、国際委員会の中で「十億の民を抱える中国の代表が出なければ真の世界会議とは言えない、何とかして庭野さんが中国に入り中国の宗教者と話し合ってもらえないか」と言われていた。その折りも折り、昭和49年の春、中国から「中国の実情を見て下さい、ぜひおいで下さい」と招待状が庭野開祖の手元に届いたのである。差出人は中国仏教協会会長である趙樸初師と中日友好協会会長の廖承志師であった。趙樸初師は国民の尊敬を集める書道家で立正佼

成会へも二度ほど訪ねて来られたこともあった。

招待状は庭野開祖にとってはまたとない神仏のお手配であった。当時の日中間は、国交は回復していたものの民間人が自由に中国を訪れる事は不可能で、飛行機の直行便もなかった時代。庭野開祖は香港を経由し、バスで広州に入り、空路北京に向かう道りであった。北京空港には趙樸初師をはじめ、中日友好協会からも出迎えが来ていた。そして、趙樸初師の努力で中国の仏教や天主教（カトリック）をはじめ多くの宗教者に集まっていたが、第二回世界宗教者平和会議の説明をすることが可能となった。そのチャンスがのちの中国代表参加につながったのである。（以下次号に続く）

一食を捧げる運動

「一食を捧げる運動…その日の食事を節食し、そのお金を人道的援助、開発援助などに役立てていただく社会運動です」

● アフリカへ毛布をおくる運動

！京都教会では850枚の毛布が寄せられました！
4月1日から全国で実施されていた「アフリカへ毛布をおくる運動」（主催・同運動推進委員会）が5月31日に終了しました。同運動に参画する立正佼成会京都教会でも、会員たちが1枚1枚毛布を集め、白布にメッセージを書いたものを縫い付けました。集まった



毛布の発送準備をする青年部員

毛布850枚は6月1日に行われた発送式の中で平和への祈りを込められ、横浜市鶴見区の大黒国際貨物センターにある日本通運株式会社の倉庫に発送されました。全国より集められた毛布は11月～来年1月にかけて会員の手によりアフリカ各国でおくられます。

● 中国・四川省大地震被害に

一食平和基金から支援

立正佼成会一食（いちじき）平和基金運営委員会（委員長＝川端健之外務部長）は、5月12日午後発生した中国南西部の四川省汶川（ぶんせん）県を震源とする「四川大地震」の被害に対し、300万円の緊急支援を決定しました。15日午後、渡邊恭位理事長が、東京・港区の中国大使館を訪れ、馬継生・政治部公使参事官に見舞金を手渡しました。

対談の中で同省出身の馬参事官は、現地の被災状況を説明したあと、中国の故事を引用し、「困難な出来事に遭遇した時、必ず友人が現れ、助けてくださると言われています。日本を含め、隣国からさまざまなご支援を頂き、深く感謝します」と謝意を表しました。渡邊理事長は、本会が進める「一食を捧（ささ）げる運動」の意義や内容に触れ、「被災者のために役立ててくださればと思います」と語りました。

佼成会ミニ知識

お数珠の持ち方《必須アイテム①》

お数珠は修行の必須アイテムのひとつ。その持ち方を再確認してみましょう。



① 3つのフサを右、2つのフサを左にし

② 1回クロスさせて左右の中指の第2関節で持ちます



手のひらでこすり合わせることでジャラジャラと音を鳴らします。買ったばかりのお数珠は硬くてなかなか馴染まないものですが、柔らかさが自分の修行の度合いと思うとうれしくなります。ちなみに、柔らかくなりすぎると切れる前に中の糸を交換してもらおうといいですね。

企業経営と平和のコーナー

「仏教を仕事に生かす」

《標準的な問題解決法と四諦の法門したい》

■問題解決手順の比較

人生苦を解決する方法として、今から二千五百年も前に、すでに解き明かされていた四諦の法門と、現在のビジネス界で広く採用されている標準的な問題解決法とを比較してみると、双方とも大変似通っていて、少なくとも問題解決の手順方法に関しては、両者全く同じであることがわかる。

標準的な問題解決法に基づく問題解決手順	四諦の法門に基づく問題解決手順
↓	↓
問題の実態把握	苦 諦
↓	↓
原因の究明	集 諦
↓	↓
改善目標の設定	滅 諦
↓	↓
改善計画の実行	道 諦

■対象となる問題領域の違い

標準的な問題解決法における問題領域は、例えば経営活動の場合、人、金、物、時間、空間、情報、技術、技能など、いわば経営資源そのものが中心となる。つまり、それら資源の運用の適否をチェックして問題点を見極め、原因を究明し、改善策を考えて実行に結びつけながら、一連の問題解決法が展開されていく。

一方、四諦の法門では、例えば問題解決に取り組む当事者自身の「心のあり方と行動」そのものが、問題領域として取り上げられることになる。つまり、どのような意識、態度でその問題に取り組んでいるかをチェックして問題点を見極め、なぜそのような取り組み方をしているのかについての原因を明らかにして、改善目標を示しながら、当事者自身の意識行動の変革を迫っていくところに問題解決法としての「四諦の法門」の特徴がある。

■二つの問題解決法は車の両輪

現在、企業内で一般的に行われている標準的な問題解決法は、いわば人間の心の外側の問題を解決するための技法であって、人間の心の内側の問題を解決するための技法としては無理がある。一方、四諦の法門は逆に、人間の心の内側に目を向け、心のあり方そのものを改善するための問題解決法とみることができよう。問題解決に取り組む当事者自身、どんなにやる気があっても、問題解決のプロセスや技法について、それなりの知識、技術を身につけていないと、意欲だけが空回りして期待通りの成果をあげることが難しい。

一方、逆に当事者に問題解決に必要な知識、技術があっても、その問題に本気で取り組む意欲が欠けていたり、態度、行動に問題があったのでは、これもまた期待どおりの成果はあげられない。

しかしこれまで、担当者個々人の内面的、心的な障害を取り除くための有効な手段が見当たらず、手つかずの状態、何らかの対策が求められ続けてきたのが実情である。そして、その隙間を埋める最も効果的な手法が、まさに「四諦の法門」であってこの考え方が二千五百年も前に仏教によってすでに確立されていたという事実は、驚異に値するといえよう。

問題解決活動を軌道に乗せて成果をあげるためには、一方において、技術的な側面の障害を取り除くための標準的な問題解決法だけでなく、当事者個々人の内面的、心的な側面の障害を取り除くための四諦の法門の助けが必要であって、この二つはお互いに補い合う関係を保ちながら、まさに車の両輪の役割を担っているのである。

■四諦の法門

<p>滅諦(めったい)</p> <p>理想・目標(結果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ お陰さまを悟る ・ 生かされている感謝 ・ 悩みが自分を成長させてくれるという気づき 	<p>苦諦(くたい)</p> <p>現状把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 苦を直視し逃げ隠れせず覚悟を決める ・ 何をどの様に悩んでいるのか?
<p>道諦(どうたい)</p> <p>努力の仕方・課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 姿 正しい行いと努力 ・ 行動 愛他、利他の行い ・ 心 感謝、奉仕の心 公平な見方 	<p>集諦(しったい)</p> <p>原因の探求</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己中心な見方 ・ 固定した見方 ・ 孤立、思い上がり ・ 貧欲、執着心

上記の表をまとめてみると

苦諦 人生は精神的な苦しみ、肉体的な苦しみ、経済的な苦しみ、その他いろいろな苦しみに満ちています。その人生苦から中途半端に逃げ隠れしないで、その実態を直視し見極める。

集諦 そういう人生苦はどうして起こったものであるかという原因を反省し、探求し、それをはっきりと悟る。

滅諦 精神的、肉体的、経済的な苦しみや、その他の一切の人生苦を消滅した安穩の境地。

道諦 自己中心的な見方をせず、大きな感謝の心を持ち、余計なことにとらわれずに、一心不乱にたゆみなく辛抱強く努力をする。

ということになる。問題解決、目標達成のためにご参考にしていただければと思います。

庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

《世界会議に向けて》

昭和44年5月、庭野開祖は真言宗の総本山である和歌山県の高野山金剛峰寺を訪れ、真言宗管長である堀田真快師に日本宗教連盟(日宗連)理事長就任の挨拶をした後、WCRP(世界宗教者平和会議)の構想を話した。「今年は私が一年間、日宗連の理事長を務めさせて頂くことになりましたが、たまたま来年の秋に、世界の宗教者を京都に迎えて世界会議をひらくことが決定しました。日本の宗教界の総力をあげて、この会議を成功させたいと存じます。私は一生懸命、みなさまの使い走り役を務めさせてもらいたいと願っております」

世界会議の概要について、庭野開祖の説明を聞かれた堀田管長は「ローマの教皇さまをはじめ、世界の宗教者の多くが一つになって協力しあおうという空気になっておるわけですね。佼成会さんの活動ぶりを見ると、つねにほかの教団に対して協力的です。あなたが音頭をとって世界会議を推進してくだされば、反対する人は少ないでしょう。私たちも全面的に協力しましょう。精一杯お務めください」と、もったいないような励ましの言葉を下さったのでした。

高野山と並ぶ比叡山延暦寺は、遣唐使船で中国に渡って天台宗を日本に伝えた伝教大師最澄によって興された寺である。庭野開祖は、その天台座主の即真周湛(つくましゅうたん)師の言葉にも、勇気づけられたのでした。「法然上人、親鸞上人、日蓮上人、さらに道元禅師、栄西禅師といった方々が、ここで勉強されました。比叡山は日本仏教の母山といってもよろしいでしょう。そんなわけで、各宗の方が比叡山に来るとけんかが出来ません。それが比叡山の徳です。比叡山はもともと修行研鑽の山で、それぞれの堂舎も修行にふさわしいように建てられております。日本と世界の平和に貢献できる指導者を育てるのに、格好の場所だと思っております。あなたが考えておられる活動のために、この山を全部お使い下さい」

「いよいよ時が来たのだ・・・」庭野開祖は座主の言葉をかみしめた。

また、仏教界の先輩方ばかりでなく、伊勢神宮の徳川宗敬(とくがわむねよし)大宮司も同じ考えを持たれた方だった。「もう宗派意識に固執している時代ではありません。すべての宗教が人類を救う役割を等しく担

っているのだという気構えを持たなくては、宗教が存立する意味がなくなってしまうでしょう」

庭野開祖は神道について、「日本人は大和民族と呼ばれていますが、その日本人のこころは大きな調和、“大和”の精神だと私は考えております。その明るく、直き心は仏教でいう大乘の精神に通じておきましょう。

日本人は、この大きな調和の精神を基盤にして、どんな教えも受け入れ消化していく寛容性をそなえていると存じます。仏教をはじめ、さまざまな外来の文化が日本に根を下ろしたのも、この心があったからだと思うのです。その日本の心を世界に広げていくことが私たちの務めだと考えているのですが」と自身の考えを述べた。

《動き始めた日本の宗教界》

庭野開祖は各宗門のトップリーダーの方々を訪ねた。臨済宗円覚寺管長・朝比奈宗源師。真宗大谷派新門・大谷光紹師。大本山総持寺貫主・岩本勝俊師。天理教真柱・中山善衛師。北法相宗清水寺・大西良慶師。薬師寺管長・橋本凝胤師。等々・・・。

当初、日宗連のなかにも宗教協力のむずかしさ、宗教が政治にかかわることに対する不安、さらに費用の分担などのことで、世界会議の開催と成果を危ぶむ声もあったが、その後、正式に日宗連がこの世界会議の主催団体となることが決定した。そして日宗連国際問題委員会が組織され、日本の受け入れ態勢が確立したのだった。

通常は年を越えると日宗連の理事長は交代するのだが、日本の宗教界は空前の大事業を前にして、責任者が代わるのは不安があるということから「ここまで庭野さんが話を進めてきて外国の委員とも懇意なのだから、開催まで担当してもらおうのがいちばんいい」という声に推されて、庭野開祖が国際問題委員会の委員長を務めることになった。

「だれかが世界の宗教者をひとつにまとめる役をしなくてはならない。だれか人がやってくれるだろうといった気持ちでは事はならない。たしかに一人では何もできないが、ひとりが始めなければ何事も始まらないのだ」庭野開祖はそう自分を励ました。

平和のための日米諸宗教者京都会議で蒔かれた一粒の種が、芽を出し、葉を広げようとしていた。(つづく)

渉外部からのメッセージ

東京秋葉原で凄惨な事件が起きました。若者による無差別殺傷事件です。一見どこにでもいるような外見の容疑者ですが昔を知る友人たちはキレやすい一面もあったとか…。テレビゲームで育った世代にとっては画面の中と現実の区別が付かなくなってしまうのでし

ょうか。言えることは、人生リセットは出来ないということ。我々は更なる布教を誓いたいものです。

この「平安月報」は下記アドレスからダウンロードできます。是非、ご覧下さい。

http://www.rkk-kinki.jp/kinki/thats_kyoto.html